

須賀川市民交流センター tette 準備企画

すかがわ、 めぐるめぐ

◎会いたいひとに会いにゆく

後藤法子さん（脚本家）

◎第二回「tette パートナーズクラブ」設立準備会レポート

ゲスト 三矢勝司さん

（NPO法人岡崎まち育てセンター・りた事務局次長）

◎tette子育て支援特集

須賀川で

子どもを育てるといふこと

第3号
2017
秋・冬

はじめに

本冊子「すかがわ、めぐるめぐ」は、「須賀川市民交流センター」のオープンに向け、一人でも多くの方に関心を持ってもらい、利用していただくために発行しています。

昨年の本誌インタビューの際に、生まれ故郷の須賀川でライブをやりたいとおっしゃっていたディーン・フジオカさんが、今年7月、須賀川市文化センターで2日間にわたり「地元凱旋ライブ」を開催しました。まさに、有言実行。地元の小・中学生とのジョイントパフォーマンスもあり、会場は熱気に包まれました。ライブの様子はディーンさんの特集した全国放送のテレビ番組でも放映されました。

市民交流センターの建設工事も、鉄骨が組み上がってきて、その全貌が目に見えてわかるようになってきました。設計図面が形になっていく様子を見ていると胸が高鳴ります。様々な課題を関係者が一丸となって乗り越えながら造りあげていく過程は、まさしく挑戦と努力の集積です。

これまでに施設の設計や活用方法などに関する市民ワークショップを34回開催し、約400人の市民の方々に参加していただきました。市民交流センターは市民の皆さん一人一人のもので。末永く使い続けてもらえる施設を目指して、これからも皆さんと一緒に建物の中に魂を吹き込んでいきたいと思えます。



須賀川市民交流センター 『人を結び、まちをつなぎ、情報を発信する場の創造』

市民交流センターは、東日本大震災で甚大な被害を受けた中心市街地の再生、活性化のため、震災によって使用不能となり取り壊された総合福祉センターに代わる新たな施設として整備するものであり、「市民文化復興のシンボル」、また「中心市街地活性化の中核施設」としての役割を担うものです。本施設は、「人を結び、まちをつなぎ、情報を発信する場の創造」を基本

コンセプトとした、図書館や公民館などの生涯学習機能をはじめ、子育て支援、市民活動団体等支援、市民交流、賑わい創出など、多くの機能を有する複合施設であり、様々な世代、立場、目的を持った人々が集い、交流し、活動することによって、まちなかに賑わいと活気が生まれ、その活力が市全体に波及していくことを期待しており、中心市街地のみならず「地方創生」、「地域活性化」の拠点となることを目指しています。



※詳しくは、市ホームページ及び専用ホームページ「声のパレット」をご覧ください。

設計と工事の現場から ②

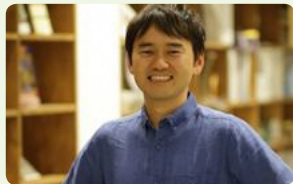
建築家・畝森泰行さんに聞く、 「すかがわトーク」の目的

須賀川市民交流センターの設計を共同で手がけている建築家の畝森泰行さんは、2017年4月より、建築現場の目の前にある“須賀川オフィス”にて「すかがわトーク」を定期的で開催しています。畝森さんが聞き手となり、須賀川市内と市外に住む人が一人ずつゲストとして登壇。最後は畝森さんも入ってのトークセッションを設け、参加者たちが理解を深め合います。

「市民交流センターに携わるなかで、いろんな面白い人を知りました。須賀川市内で精力的に活動をされている方と須賀川に関わりのある市外の方をお呼びしていますが、このトークを通じてその方たちをつなげられたらと思ったのが、開催のきっかけでした」

全体のテーマは「須賀川の街についてみんなで考えよう」。そんな畝森さんもまた、これからも須賀川とつながりたいと語ります。

「僕たちが主催しているので、誰もが自由に参加し、話せるのがこのイベントの売り(笑)。市民交流センターが建った後、どんな街にしたいか、みんなで自由に話し合う場にしたいと思っています。僕自身も建築家として、建物が建ったらさようなら、ではなく今後どう施設が育っていくのかにも関わっていきたい。そのためにも、今何ができるか、僕自身がやりたいテーマをベースに、イベントを続けながら考えていきたいですね」



第5回目(9/21開催)の様子。毎回約30人の参加がある「すかがわトーク」は当日参加も大歓迎、と畝森泰行さん。過去の開催や告知は「須賀川プロジェクト室」facebookページで。

石本・畝森特定設計共同企業体の
須賀川オフィス
(市民交流センタープロジェクト室)

須賀川市中町50-3 関谷ビル1F
0248-94-8320
須賀川プロジェクト室
https://www.facebook.com/sukagawaoffice/

◎もくじ

はじめに 02

須賀川市民交流センターについて／
設計と工事の現場から ② 03

「一緒につくる、考える」
ワークショップレポート 04

市民交流センターの準備
設立準備会レポート 05

会いたいひとに会いにゆく
第三回後藤法子さん(脚本家)
いま、出会う風景 ③ 06

須賀川で子どもを育てるといこと
わたしの図書カード 03
清水麻美さん
(福島県立須賀川桐陽高校主任学校司書) 09

あなたへの一曲 03
青津欽一さん
(テコステイックタウンぶかぶか) 12

ふれあう街 ② 13
すかがわ子ども食堂わらわら
編集後記 14

POINT OF VIEW 定点からの記録
随想リレー ③ 15

◎表紙 16

現場仮囲い「関係者1万人プロジェクト」と
子どもたち 17

「おはようございます！」と元気な声で登場してくれたのは、工事現場近くにある「天泉こども園」に通う年中クラスのみなさん。お散歩の途中で撮影に協力してくれました。子どもたちと共に成長する施設の未来を思い描いた1日。



高校生から20代の参加が目立つ
活気あふれるワークショップになりました。

2016年11月に牡丹会館多目的ホールにて開催。

「一緒につくる、考える」ワークショップレポート
かえりたくなる街のつくり方 vol.105

ゼロから作る街の映画館

「映画」を切り口に、人と街をつなげよう

2015年より、市民交流センターの活用仕方
市民と一緒に考えるワークショップ「かえりたくなる
街のつくり方」を行ってきました。第5回目のゲスト
は、白河市在住の老舗和菓子屋「大黒屋」の4代目、
NPO法人カルチャーネットワーク副理事長を務める
古川雅裕さん。「映画」を切り口に、今、須賀川が抱
えている課題とその改善点について話し合いました。
古川さんは、映画館がない白河市に公共の施設を活用
した市民のための映画館を作ったり、震災直後に福島
県全土をロケ地にした映画『トテチター・チキチター』
(2012年全国公開)のプロデューサーを務めるなど、
分野を問わず精力的な活動をしてきました。そんな古
川さんを突き動かしているのは、故郷への想い。
「10万人に満たない都市で映画館を作るのは難しい。
でも地方だから観られないという理不尽さが嫌だっ
た。待っていてもできないから、ビジネスじゃない方
法で観られる環境をどう作るかを考えた」と古川さん。



「一緒につくる、考える」ワークショップ
かえりたくなる街のつくり方
ワークショップシリーズ「かえりたくなる
街のつくり方」は、須賀川市民交流セ
ンターの開館後の具体的な利用方法につ
いて想像を巡らせ、皆さんの毎日がより
充実していくことを目的としています。

白河市と同じく、須賀川にも映画館がありません。例
えば、市民交流センターで映画を上映するとしたら、
交通の便や立地の問題をはじめ、告知手段の工夫が必
要という課題も見えてきました。また、上映時間を分
けて世代毎の興味に合わせた作品の上映や、来年で30
周年を迎える「すかがわ国際短編映画祭」と連携した
企画、まちなかにある空き家を利用して街全体の活性
化を目指すなど、市民交流センター内に留まらないア
イディアもたくさん出ました。10代の学生からは、映
画の待ち時間に過ごせるおしゃれなカフェが必要との
声も！ アイディアは引き続き募集中です。

◎第2回tetteパートナーズクラブ設立準備会レポート

三矢勝司さん「学べる」と「真似ること」を迎えて

今年10月6日(金)に「tetteパートナーズクラブ」
設立準備会が市内で開催され、愛知県岡崎市より、
NPO法人岡崎まち育てセンター・りた事務局次長
の三矢勝司さんをゲストにお迎えしました。図書館
を核とした市民交流施設、岡崎市図書館交流プラザ
「りぶら」の中にある市民活動センターの運営管理
を行う「りた」と、任意登録制の「りぶらサポータ
ークラブ」との協働による施設運営は、全国屈指の
成功事例として知られます。働き手が必要な組織・
団体と、関わりたい・働きたいひとをマッチングす
るボランティアの仕組み「まちびとバンク」、教え
たいひとと習いたいひとの需要を合わせた「りぶら
講座」は年間200講座を開講するまでに、また、



岡崎市図書館交流プラザの立ち上げ
(2004~08年)では、市民と行政の間に立
ちコーディネートを行った三矢さん。



進行役は市民交流センター管理運営協議会
のアドバイザーを務めるアカデミック・リ
ソース・ガイドの代表岡本真さん。



三矢さんのお話を聴講後、市民、行政職員
混合の3グループに分かれて意見交換。活
発な議論が交わされた。



グループ毎の発表では「読んでもらうこと
が重要な印刷物は、予算をつけてプロに頼
むのがおすすめ」というアドバイスも。

- 市民と協働で運営する公共施設
(みんなの居場所) つくりのポイント
- 「行政」が、市民との対話において情報公開、
説明責任をきちんと行うこと。
- 「市民」が、行政とパートナーであること
を認識し、主体的に検討、行動すること。
- 「市民」と「行政」をつなぐ「専門家(コー
ディネーター)」の活用が有効であること。

市民の声から立ち上がった「託児サービス」など、
どれも施設の大切な役割を担います。

「りた」のこうした先進事例を学びながら、須賀川
に活かせることは何かを、3つのグループに分かれ
てワークショップ形式で議論しました。進行役の岡
本さんは、「歴史を学ぶことと同じで、真似ること
は悪いことではなく、むしろ賢いやり方。須賀川の
10年先を歩いている岡崎市の素晴らしい取り組みか
ら、わたしたちが学べることは何かを考えていきま
しょう」と締めくくりました。



◎tetteパートナーズクラブ 設立準備会とは

市民交流センターを市民と協
働で運営することを目指す
「tetteパートナーズクラブ」
を立ち上げるための準備会。
2017年7月に募集を行い、現
在市民18名と市の職員らで
定期的に勉強会を開催。

脚本家 後藤法子さん

たくさんの“好き”の
ひとつが導いてくれた
脚本家という仕事

人気シリーズとなった『チーム・バチスタ』シリーズや『家族ノカタチ』、『嘘の戦争』といったテレビドラマ。さらには『神様のカルテ』や『僕だけがいない街』などの映画まで。人気のドラマや映画の脚本を数多く執筆している後藤法子さんは、生まれも育ちも須賀川市。現在は東京に居を構えているが、須賀川の風景は今でも思い出すことがあるそう。

「須賀川と聞いてよく思い描くのは、通学路と牡丹園。小学校と中学校が牡丹園の近くだったので、よく掃除をしていたんですよね（笑）。牡丹園で絵を描く授業があったり。懐かしいですね。今も年に一回は実家に帰っていますよ。私にとって須賀川は、“いつでも帰れる場所”なんです」

須賀川で過ごした子ども時代、今につながる出来事を思い出してもらった。

「小・中・高とずっと漫画を描くのが好きで、漫画家になりたいと思っていました。同じように漫画を描くのが好きな友達と、チラシの裏に描いた漫画を見せ合っていましたね。でも少しずつ、自分の絵では漫画家にはなれないだろうなと思うようになって。今思えば、絵を描くのも好きだったけど、それよりもお話を考えるのが好きだったんだと思います」

学校の図書館や須賀川の図書館に行き、たくさんの本を読んでいた少女時代の後藤さん。難しい本も頑張って読んでいたそう。

「あの頃は、よくわからないのとにかく海外の小説をいっぱい読んでいました。『罪と罰』、『嵐が丘』、『カラマーゾフの兄弟』とか。遠い世界のお話を読みたかったんですよね」

もっと世界を見たい、英語を使った職業に就きたいと神奈川の大学に進学。しかし大学時代に演劇や映画の面白さに目覚め、大学を中退してシナリオを勉強。脚本家への道



ごとう・のりこさん

1967年、須賀川市生まれ。福島県立須賀川女子高校（現・須賀川桐陽高校）卒。2000年、ドラマ『バカヤロー！2000』で脚本家デビュー。手がけた主な作品に、ドラマ『チーム・バチスタの栄光』、『都市伝説の女』、『銭の戦争』、『家族ノカタチ』、『嘘の戦争』、映画『神様のカルテ』シリーズ、『僕だけがいない街』などがある。

を歩み始めた。

「東京には名画座といわれる、昔の映画を2本立て、3本立てで見られる映画館がたくさんあることに驚きました。映画や演劇の世界を知って、自分も関わりたいなって。小劇団で裏方をやったり、俳優として舞台上に立つてみたことも。映画の監督もやってみたいとか、いろんなことを試してみたいんです。その中で脚本が一番しっくりきました。小説家も考えたけれど、小説は書いたら完結するのに対して、脚本は書き終わったところがスタート。俳優さんのお芝居や監督の演出、そのほかのスタッフさんのお仕事などいろんなものが加わって、ようやく完成する。みんなで作るものという感覚も好きなんです」

書いた脚本がそのまま採用されることはなく、プロデューサーや監督などの意見が加わり、何度も書き直すのがプロの世界。それでも後藤さんは、「書くのが好き。だから続けていけるんです」と笑顔で話す。

「須賀川の子どもたちには、好きなことや楽しいことをいっぱい探して、その“好き”という気持ちを大事にしてほしいなって思います。子どもの頃の私にとっての“好き”は、物語を考えることでした。その後も好きなことがいっぱいできて、いろんなことに手を出して、やっと脚本家に落ち着きました。夫から、『書くことに関して、きみの“好き”には敵わない』って言われたことがあります。確かに私はいつも、自然とお話を考えちゃう。目の前の締め切りが大変なのに、『次の企画でこんなお話をやれないかな』って考えるのも大好き。“好き”は私の原動力ですね」



私をするサーブ

須賀川市立長沼中学校
小林叶実さん



将来の夢は
保育士さん！



勢いよく打ち放たれたボールは空の端まで飛んでいった。作品の印象が

ら想像していた人物とは違う小柄で柔らかな雰囲気の小林叶実さんは、物静かな声の持ち主。小学生の頃は背が高く、元全日本選手の木村沙織さんに憧れて中学校ではバレー部に入ったそう。部活は毎日16時半から18時半まで。コーチが月毎に変える練習メニューは厳しいけれど、とにかく、「サーブをするのが好き」と言う。同じバレー部の友だちは「叶実はおつとりしているけれど、面倒見が良くてしっかりモノ！」と話してくれた。その隣りでニコニコ笑う叶実さんが、サーブする姿をもう一度想像してみる。内に秘めた芯の強さでボールがまっすぐに飛んでいく様子が目に浮かんだ。

第28回「田善顕彰版画展」。国の重要文化財にも指定されている須賀川が生んだ江戸時代の銅版画家、田善の功績を顕彰する目的で平成元年から続く作品展。今年は小・中学生から約3000点の応募があった。



高田美里さん



柳沼涼子さん

◎tette子育て支援特集

須賀川で子どもを育てるといふこと

子育て世代にとって、市民交流センター「tette」（以下、tette）はどのような機能を担ってくれるのでしょうか。須賀川で子育てをする女性たちの本音と理想から、tetteに欲しい機能を探りました。



円谷理恵さん
11か月の光貴くん



阿部こずえさん



Mammy's Garden
須賀川で子育て中の女性6人を中心とした市民活動団体。個性溢れる各メンバーのキャリアや日常の関心ごとをコンテンツ化して企画運営するほか、市内近郊の子育て情報を発信している。※この日、メンバーの佐藤良恵さんは欠席。



長谷部久美子さん（代表）

2017年8月、須賀川で子育てをしながら活動続ける

Mammy's Gardenのみなさんと、

日々、どんなことを感じながら過ごしているのかを探るためのワークショップを行いました。お話を伺うなかで見えてきたのは母・妻でありながら、「ひとりの女性としての在り方」でした。

定期的かつ気軽に会話ができて、仲間が見つかる場

子育ては、子どもの成長に大きな喜びを感じる一方で、初めてのことに戸惑いが多いのも実情です。育児に割く時間が増えることから社会との接点が希薄になるなど、子どもも大人もそれぞれに満たされる非日常の場

子どもも大人もそれぞれに満たされる非日常の場

センスのよい空間にキッズスペースとおいしいコーヒーや食べものがあるカフェも増え、地元にも根付いた自然食品を扱う店舗と共に活用しているそう。子どもたちは自分も主役。心を解放し、知的好奇心を満たす場

子どもたちが楽しんでいられる感じながら、ほんの数時間でも何も考えずに関心のある本を読んだり、受講したいセミナーに参加することができればリフレッシュするだけでなく、刺激も得られ、また明日もがんばれる。少しの間でも心を解放できる環境が整った場があるといいなという声もありました。

tetteってどんな場所なのですか？

今回は須賀川の子育て世代を代表して、Mummy's Gardenのみなさんに、市民交流センター「tette」に新しく入る子育て支援機能を中心に、図書館機能や公民館機能について取材をしていただきました。

「子育て支援機能」 —遊び、学び、支援が一緒のフロア—

M : Mummy's Gardenのみなさん **市** : 須賀川市役所職員

M 年齢制限はありますか？

市 現行のすかがわキッズパークは未就学児までの入場に限りはありますが、tetteのこどもフロアは年齢制限がなく、小学生のお子さんにもご利用いただくことができます。未就学児と小学生の兄弟がいても一緒に利用することができるようになります。

M こどもフロアはどのような空間になりますか？

市 簡単な入場登録をして遊ぶスペース（90分入れ替え制・無料・土足厳禁）があり、空間構成は、宙に吊られた網の上で遊べる「ネット遊具」や、小高い丘のような形状の床が特徴的な「なみなみ床」、「砂場」、テラスでは「夏場限定のプール」など、空間そのものの力でお子さんの身体能力を引き出すような設計が成されています。雨の日でも思い切り身体を動かして遊ぶことができます。

「図書館機能」 —館内はどこでも図書館—

M 新・図書館の大きな特徴を教えてください。

市 tette全体のコンセプトが「活動と本が近い」ことなので、たとえばこどもフロアの傍には、興味の幅を広げる赤ちゃん絵本や児童書を置き、保護者向けには子育て関連本、料理など日常生活で役立つ本、ほっと一息つける本や雑誌なども置く予定です。ほかにも館内のあちこちに本が置かれますので、お好きな場所、お気に入りの本を見つけてみてください。

「公民館機能」 —民間発信のイベントも行える場所—

M 母親同士が自然に交流できる機会が欲しいのですが、ハロウィンなどの季節性の高いイベントを全館行事として行ってみるのはいかがでしょうか？ 全館をあげて盛り上げるイベントを、対象年齢を区別らずに行うことで、ボランティアなどの運営側として関わっても、また参加者として関わっても、異年齢の子を持つ母親同士や子ども同



M 見守っていただけるサポーターの方はいますか？

市 見守りスタッフを配置します。周りにテーブルや椅子のあるスペースもあるので、お子さんが遊んでいる様子をご覧になりながら、安心して過ごして頂けます。また、親御さんたちの交流の場、情報交換の場にもなります。

M 一時保育の条件を教えてください。

市 生後6ヶ月から6歳までの未就学児をお預かりします。料金設定は未定ですが、子育て中の方がtetteで行われる講座などに参加したり、ゆっくり本を読んだりして、リラックスして過ごしていただく一助となればと考えています。

士が自然に交ざり合える機会となりそうです。合わせて、シルバー世代の方とも交流できると、なお嬉しいですね！

市 それはいいアイデアですね。開館後は、tetteオリジナルイベントの企画運営や、まちなかとの連携イベントも積極的に行う予定です。公民館のままだと、社会教育を含めたもっと幅広い事業を展開していくコミュニケーション施設として位置付けています。民間の方にお貸しして、カルチャースクールのようなものを主催いただくことも可能です。Mummy's Gardenさんをはじめ、市民活動団体のみなさんにもどんどん活用いただきたいと思っています。また、シルバー世代の方にも「tetteパートナーズクラブ」の活動などにご興味をお持ちいただけたら、ぜひ豊かな人生経験を分けてもらえたら有り難いです！

◎こんなアイデアも飛び出しました！

2Fこどもフロアには、一部、飲食可能なスペースが設けられています。1Fにコンビニエンスストアやカフェも入りますが、荷物を抱えてお子さんと移動するのも容易ではありません。そこでMummy's Gardenさんから出たアイデアが「移動式コーヒースタンド」。日替わり当番制でご協力いただける店舗を公募して、館内を回遊しながらコーヒやおやつをデリバリーしてもらうというもの。まちなかの活性化にもつながるので、実現できたら嬉しいですね！

「tetteに来て、みんなが元気になって帰れるといいですね。子どもは思い切り身体を動かして遊べるし、大人は誰かと話ができて、知的好奇心も満たせる場所に」(Mummy's Garden)

「市役所は用事を済ませに行く場所かもしれませんが、tetteならふらりと気軽に立ち寄れて、いつでも誰か相談できるひとがいる。そんな場所に」(須賀川市役所)

質問にお応えした職員たち



菅野佳子さん
須賀川市図書館
司書



岡崎朋子さん
須賀川市図書館
司書



羽生規子さん
子育て支援係長
兼社会福祉主事



増子英之さん
市民交流センター整備室
主査



佐久間貴士さん
市民交流センター整備室長



選者・アコースティックタウン ぶかぶか
青津欽一さん

『人間なんて』

作詞・作曲・歌：吉田拓郎

僕は、明治8年創業の青津陶器店という陶器屋の5代目。ただ僕が代で店を閉めた。店の跡地の活用を考えていた頃に、幼なじみの友人が亡くなってしまった。彼はずっと音楽をやっていたので追悼ライブをやろうとなり、「ここでやれるんじゃない?」と、陶器店だった実家をライブハウスに改修したのが2007年のこと。第二の人生をのんびり生きようと、「ぶかぶか」って名付けたんだ。それから10年、たくさんのミュージシャンに利用してもらっている。須賀川に音楽を愛する人がこんなにいるんだって驚くぐらい。

『人間なんて』は、僕が歌を始めるときっかけ。当時20歳ぐらいだった僕は、思ったことをストレートに歌詞にする拓郎に共感していたんだよね。カッコつけないのがカッコいい。若者たちの代弁者だったんだ。

子どもの頃の須賀川と聞いて思い出すのは、手作りの鉾石ラジオを聴くために友達と行った宇津峰山山頂で、空飛ぶ円盤を見たこと！慌てて家に帰ったら母ちゃんに「外では話すんじゃないよ」って言われたけど、友達も見ただから間違いない。あの風景はずっと心に残るんだろうね。



青津欽一さん
2007年、須賀川市に中古ギター販売、カフェ、ライブハウス「ぶかぶか」をオープン。5人組バンド「NEOピオニヤ団」では、ボーカル&ギター担当。県内外で活動中。

本

と

音

楽

と

わ

た

し

選者・福島県立須賀川桐陽高校 主任学校司書
清水麻美さん

『増補改訂版 ^{あお}蒼 ^{ばえ}蠅』 求龍堂

著：熊谷守一

大学生の時の私は、あれもこれも、いろんなことに興味がありました。授業で先生の話聞くのもすごく楽しい。進路を決められない時にふと、「図書館だったらなんでもあるな」と思い、司書の資格を取りました。

ある時、母に熊谷守一さんを教えてもらい、その魅力に一気に引き込まれました。福島県立美術館で熊谷さんの展覧会が開催され、とても嬉しかったのを覚えています。熊谷さんは仙人のような暮らしをされていた画家で、全く気負いが無い自然体の人。蟻を一日中

でも見ているような方だったそうです。熊谷さんの絵は、そのものが持っている真の部分、純粋な部分をさっとすくい取っているように。熊谷さんの絵や言葉を集めた『蒼蠅』は図書館で知ったのですが、2014年に改訂版が出たのを機に購入しました。たまに開くとホッとします。私にとってそんな本です。市民交流センターにできる図書館はやはり気になります。館内のあちこちに本があると聞いているので、高校生たちが気軽に立ち寄られて、新しい世界に出会ってくれたら嬉しいです。



清水麻美さん
福島県いわき市生まれ。福島県立図書館、白河実業高校勤務を経て、2013年より須賀川桐陽高校勤務に。須賀川は「人が優しいです。お祭りが多いところも好き」と語る。



編集後記



共通して言えるのは、彼女たちの笑顔！ その笑顔にぎゅっと勇気をもらうことも。

(2017年10月スタイルウォーター)

約1年ぶりに3号目をお届けすることができました。今回の取材では、市内で活躍する沢山の女性たちと出会いました。P9〜11で協力してくれた「マミーズガーデン」さんは、子育てと両立しながら等身大で活動続ける姿が印象的でした。また、「すかがわ子ども食堂わらりら」では一緒にご飯も食べました。誰が作ったのか、誰と一緒に食べたのかはとても大事で、料理は美味しさと一緒にその大切さを伝えてくれます。ひとの手が入ることで料理が美味しくなるように、施設もそんな風に育てていくことができるのではないかと感じた、そんな秋の始まりでした。

柔らかな手

◎声のバレット／須賀川市民交流センター
プレサイトについて
開館するまでの期間、準備や計画に参加していただける場の一つとして、須賀川市民交流センターにまつわる情報を発信していきます。
<http://sukagawaodeko.jp/>



◎本冊子タイトル「すかがわ、めぐるめく」について
「めぐるめく」とは、ここでは「光景が極めて美しいさま」を「めぐめく」と「〜」になっていくという進行形を表す「〇〇めく」を合わせた造語。沢山のひとが行き交う須賀川市民交流センターで、「ひと」や「もの」や「ものごと」が巡り、沢山のきらめく光景が生まれる場所になることを願って、このタイトルをつけました。

◎本冊子に描かれたイラスト

「窓から続く風景―須賀川駅の駅舎と電車―」(P2)、市の鳥「カワセミ」と「金ゴテ」(P15)。金ゴテ(こて)は、工事現場内で働く左官職人さんが使っている道具のひとつで、コンクリートの表面を平らに仕上げる時に使われます。

発行人：須賀川市市民交流センター整備室
企画・編集・制作：株式会社 スティルウォーター
アートディレクション・デザイン：畔柳仁昭(株式会社 サザランド)
表紙写真：村越としや(写真家)
協力：石本・畝森特定設計共同企業体
三井住友・三柏特定建設工事共同企業体
アカデミック・リソース・ガイド株式会社
印刷・製本：株式会社 星総合印刷
発行元：福島県須賀川市



ふれあう街②

すかがわ子ども食堂わらりら

子どもじゃなくてもOK! ひとつ屋根の下で得られる心の栄養

三丁目会館で毎月第4土曜日に行われている「すかがわ子ども食堂わらりら」は、市民ボランティア団体kokoyoriが開催している子ども食堂。中学生以下は無料、大人も300円以上払うと、手作りの料理を食べられる。集まったお金は、のちの資金となる仕組みだ。わらりらを始めたきっかけや現在の課題などについて、kokoyoriのみなさんに話を聞いた。

「私の実家は図書館や公民館の近所にあるのですが、周辺の小学校、中学校の子どもたちが、いつも放課後に集まっていて、外で買って来たものを食べている子もいた。みんな居場所を求めているのかな、この子どもたちが集まれる場所があったらいいのかな」と思い、お友達の内山裕子さんと一緒に2016年7月に子ども食堂を始めました(熊田ひろみさん)

わらりらで使う食材は、活動に賛同する市内の農家からの提供や、kokoyoriで借りている畑で採れた野菜が中心だ。採れたて、作りたてのご飯を、みんなで食べることが何よりの目的。この場所は第2月曜日15時半〜20時の間、「放課後わらりら」というコミュニティにもなる。大人たちがボランティアで小・中学生の宿題や勉強を見て、終わったらみんなで食事をする。家族や学校以外の大人との交流は、子どもにとって新たな成長に繋がるに違いない。子ども食堂という名前だが、1周年を機に「みんなの食堂わらりら」に変更して、中・高生や一人暮らしの方など、もっと多くの人に知ってもらい、活動を広げたい、というのが、熊田さんたちの目下の願いだ。



この日のkokoyoriスタッフ。左からたっくん、あやちゃん、ひーちゃん、ゆうちゃん、はなちゃん、やっちゃん、なおちゃん、はすみん。仲間同士はニックネームで呼び合う。



市内で採れた野菜をスタッフみんなで調理。一緒に楽しく作ることがおいしさの秘訣？



大人も夢中になれるボードゲーム。郡山でボードゲームの会を行う戸部さんが参加。



赤ちゃんの面倒は周りの人たちが見てくれるので、お母さんもゆっくり食事をとれる。



ゼラチンとかき氷シロップを使ったグミ作り。型に入れて冷やせば出来上がり！



スタッフたっくんのお手製トマトソースを使った、ミネストローネ風野菜スープがメイン。

定点からの記録

写真・村越としや



POINT OF VIEW

随想リレー③

『想い』

市民交流センターの建設工事が始まって約1年半が過ぎた。仮囲いの外から見ても建物の骨組みである鉄骨がそそり立ち、形状がわかりつつある。どんな建物になるのだろうか。

施主の想い：それは市民文化復興のシンボルとして多世代にわたる市民の交流拠点を創ること。設計者の想い：それは市民から長きに渡って愛され、活用されることで息づいていく建物を創ること。

そして施工者の想い：それは施主・設計者の想いを形にしながら、限られた時間の中で様々な価値観・意見を集約し、持てる技術と長年の経験を注ぎ込んで、過去にとらわれることなく、安全で安心な建物を創り上げることだ。

そうして完成した建物が須賀川市民のみなさんに末永く愛され、活用していただけるように。

文・渡邊裕司（市民交流センター建設工事現場代理人）

1965年東京都生まれ。国土領大学工学部建築学科卒業後1989年4月三井建設株式会社入社（2003年4月1日付、三井住友建設株式会社に社名変更）東北6県各地にて建設工事に従事、福島県内では福島空港旅客ターミナルビル建設工事、白河市内中学校の建設工事を担当し、2016年3月より市民交流センター建設工事に携わる。

写真・村越としや（写真家）

1980年須賀川市田中生まれ。日本写真芸術専門学校卒業。2011年日本写真協会賞新人賞、2015年さがみはら写真新人奨励賞受賞。写真集「沈黙の身はすべて言葉だった」月に口笛」他多数。